非行少年の社会認知に関する研究（その２）

矯正協会附属中央研究所　末永　清
井部　文哉
渡部　正
山口　悦照
市原学園　田島　秀紀*
横浜少年鑑別所　濱井　郁子**

キーワード：言語連想法，自由記述法，価値，否定的感想，マスコミ

1　はじめに

本研究は，紀要第11号に発表した報告の続報である。前回報告では，非行少年の社会認知の基盤となる人生観や暮らし方，規範意識，非行防止方略など種々の見地から分析を試みた。その結果，非行少年は，自分自身の生活や身近な人との愛情関係を重視する一方で，経済的成功や名声を得ることなどには消極的であることや，地域社会及び一般社会など社会的事象への関心が希薄であり，社会のしきたりや習慣にとらわれることへの拒否感が強く，納得のいかないことはしないなど，いわば自分中心の傾向ないし私生活主義の傾向が顕著に認められた。もとより，これらの傾向は，既存の研究から，近年の日本の青少年に共通して見られることであり，非行少年にのみ見られる特性としたわけではない。これらの傾向が非行少年により強く認められることを指摘したものである。

なお，以上の結果は，調査票のうち，多肢選択方式により回答を求めたものから得られたものであるが，今回の報告では，非行少年が彼ら自身を取り巻く環境をどのように認知しているか，言語連想法や自由記述法によって，いわば「生の声」で明らかにしようとするものである。

2　目的

非行少年の生活観，規範意識，社会認知などの特性と非行行動との関連を明らかにすることを目的とする。

3　方法

(1)　調査対象

2000年10月18日から同年11月30日までに，全国の少年鑑別所に観護措置決定により入所した少年のうち，男子1,641名，女子243名，合計1,884名を調査対象とした。

調査対象者の属性等に関するデータの詳細については，前回報告を参照されたいが，要約すると，男子が16～18歳で全体の60.7％を占めるのに対し，女子は15～17歳で全体の67.5％を占めている。また，本件を含む非行歴では，男子が財産犯，交通犯，粗暴犯の順で多いのに対し，女子は財産犯，薬物犯，粗

*前矯正協会附属中央研究所　**元矯正協会附属中央研究所

暴犯の順で多くなっている。入所回数では，初入者が男子75.1%，女子83.8%である。本件共犯者数は，男女ともに共犯者ありが多く約7割を占める。本人の共犯者中の役割は男女ともに「共同」が約3割を占める。ただし，男子では，年齢とともに「主導」の割合が増加している。不良集団所属の有無については，「所属なし」が男女ともに多く5～6割を占める。何らかの不良集団に所属する者については，男子は暴走族が多く(26.5%)，女子では地域不良集団が多い（20.3%)。

なお，今回報告のうち，重大少年事件の認知については，分析対象を限定したので，当該項目のところで報告する。

(2) 調査方法

本研究は，調査票によるアンケート方式で実施した。調査票は，職員用と少年用の2部で構成されている。詳細については，前回報告を参照されたい。

4　結果

(1) 言語連想法による社会認知

ア　言語連想法

言語連想法とは，刺激語の第一印象や意味範囲の広がりを探索する方法であり，刺激語を読み，最初に思いついた言葉を自由に記入させるものである。今回は，非行少年が社会を認知する上で重要な意味を持つと考えられる人物，「警察官」「近所の人」「親」「学校の先生」という刺激語に対する反応を分析することとした。

連想された言葉は，關崎（1989）の分類項目名を参考に修正を加え，表1のとおり分類した。単語の整理方法として，複数の単語が記入された場合は最初に記載された単語を採用することとし，単語に続く助詞及び助動詞は除外した。

イ　結果

表2は，「警察官」から連想された反応を整理し，性別・年齢群別に頻度の高い順に示したものである。男女のどの年齢群も否定的評

表1　分類項目名とその内訳

分類項目名	内　　容
肯定的評価	優しい，信用，偉い，なりたい，安心，いい人，正しい，かっこいい，しっかりしている，親切，強い，平等，必要，頭いい
否定的評価	怖い，自分勝手，嫌い，頼りにならない，しつこい，敵，不平等，不必要，しがらみ
家庭・家族	家，子供，親戚，(愛)
身体・外見	健康，背広，個人名，庁名，警察官，制服，パトカー，おじさん，おばさん，母，父，眼鏡，
不　　在	離婚，帰ってこない，いない，いる
謝罪・感謝	ごめんなさい，ありがとう，お世話になった，孝行したい，許してください
仲　　間	友情，末永く，連れ
遊　　び	泊る，スキー
数	多い，大勢
所属する場所	警察，学校，交番
仕事内容	会社員，働く，悪人捕まえる，逮捕，治安守る，どなる，人命救助，教える，授業
金　　銭	お金，給料
状態・状況	忙しい，大変そう，ストレス
普　　通	普通，あたりまえ，人間
両価的評価	いい人・悪い人，好き・嫌い，怖い・やさしい
無　関　心	どうでもいい，関係ない，気にしない，知らない，分からない，他人
あいさつ	おはよう，こんにちは，こんばんは

表２　警察官の分類表

	年少群（14-15歳）			中間群（16-17歳）			年長群（18-19歳）		
	分類項目名	N	%	分類項目名	N	%	分類項目名	N	%
男子	否定的評価	138	40.59	否定的評価	255	38.23	否定的評価	210	36.84
	肯定的評価	99	29.12	肯定的評価	190	28.49	肯定的評価	155	27.19
	仕事内容	48	14.12	仕事内容	111	16.64	仕事内容	115	20.18
	状態・状況	17	5.00	状態・状況	34	5.10	状態・状況	26	4.56
	身体，外見	16	4.71	身体，外見	29	4.35	謝罪，感謝	23	4.04
	謝罪，感謝	5	1.47	謝罪，感謝	23	3.45	身体，外見	22	3.86
	無関心	4	1.18	無関心	10	1.50	普通	6	1.05
	数	3	0.88	普通	7	1.05	該当なし	6	1.05
	所属する場所	3	0.88	該当なし	3	0.45	所属する場所	3	0.53
	普通	3	0.88	所属する場所	2	0.30	無関心	2	0.35
	該当なし	3	0.88	金銭	2	0.30	金銭	1	0.18
	金銭	1	0.29	仲間	1	0.15	数	1	0.18
小計		340	100		667	100		570	100
女子	否定的評価	42	49.41	否定的評価	40	39.22	否定的評価	19	39.58
	肯定的評価	22	25.88	仕事内容	23	22.55	肯定的評価	16	33.33
	仕事内容	10	11.76	肯定的評価	19	18.63	仕事内容	6	12.50
	身体，外見	3	3.53	状態・状況	10	9.80	身体，外見	2	4.17
	状態・状況	3	3.53	身体，外見	6	5.88	謝罪，感謝	2	4.17
	無関心	3	3.53	謝罪，感謝	2	1.96	普通	1	2.08
	所属する場所	1	1.18	仲間	1	0.98	無関心	1	2.08
	謝罪，感謝	1	1.18	無関心	1	0.98	該当なし	1	2.08
小計		85	100		102	100		48	100

表３　学校の先生の分類表

	年少群（14-15歳）			中間群（16-17歳）			年長群（18-19歳）		
	分類項目名	N	%	分類項目名	N	%	分類項目名	N	%
男子	肯定的評価	147	43.49	肯定的評価	284	42.51	肯定的評価	235	40.52
	否定的評価	91	26.92	否定的評価	174	26.05	否定的評価	127	21.90
	仕事内容	36	10.65	仕事内容	90	13.47	仕事内容	94	16.21
	身体，外見	24	7.10	身体，外見	37	5.54	身体，外見	40	6.90
	状態・状況	11	3.25	状態・状況	28	4.19	無関心	25	4.31
	謝罪，感謝	9	2.66	無関心	23	3.44	状態・状況	23	3.97
	無関心	8	2.37	謝罪，感謝	12	1.80	謝罪，感謝	13	2.24
	該当なし	6	1.78	該当なし	10	1.50	該当なし	12	2.07
	あいさつ	3	0.89	不在	2	0.30	仲間	3	0.52
	所属する場所	2	0.59	仲間	2	0.30	所属する場所	3	0.52
	数	1	0.30	所属する場所	2	0.30	普通	3	0.52
				普通	2	0.30	あいさつ	2	0.34
				あいさつ	2	0.30			
小計		338	100		668	100		580	100
女子	否定的評価	36	42.35	否定的評価	43	42.16	肯定的評価	16	32.65
	肯定的評価	21	24.71	肯定的評価	25	24.51	否定的評価	14	28.57
	仕事内容	10	11.76	仕事内容	16	15.69	仕事内容	5	10.20
	身体，外見	7	8.24	身体，外見	10	9.80	該当なし	4	8.16
	無関心	7	8.24	無関心	3	2.94	状態・状況	3	6.12
	状態・状況	4	4.71	謝罪，感謝	2	1.96	無関心	3	6.12
				所属する場所	1	0.98	不在	2	4.08
				状態・状況	1	0.98	身体，外見	1	2.04
				該当なし	1	0.98	謝罪，感謝	1	2.04
小計		85	100		102	100		49	100

価が4割弱から5割弱を占め，肯定的評価及び仕事内容がその次に続いている。

表3は，「学校の先生」から連想された言葉を整理し，性別・年齢群別に頻度の高い順に示したものである。男子は，どの年齢群も肯定的評価，否定的評価，仕事内容の順であり，この3つで約8割を占めている。女子の年長群も男子と同じ順序となっているが，年少及び中間群では，否定的評価，肯定的評価，仕事内容の順であり，否定的評価が上位にきている。

表4は，「近所の人」から連想された言葉を整理し，性別・年齢群別に頻度の高い順に示したものである。男女ともどの年齢群においても否定的評価，肯定的評価の順であり，また，無関心の割合が上位にあるのが特徴的である。

表5は，「親」から連想された言葉を整理し，性別・年齢群別に頻度の高い順に示したものである。男子は，どの年齢群も肯定的評価，謝罪・感謝，否定的評価，身体・外見，仕事内容の順であった。一方，女子では，どの年齢群においても肯定的評価が過半数を超えているが，それに続く項目は各群で異なっている。また，男子に比べて，どの年齢群でも謝罪・感謝の割合が低いといえるだろう。

(2)　少年重大事件の認知

ア　自由記述法

近年，社会的関心の高まった少年事件を，非行少年はどの程度認知し，どのように考え

表4　近所の人の分類表

	年少群（14-15歳）			中間群（16-17歳）			年長群（18-19歳）		
	分類項目名	N	%	分類項目名	N	%	分類項目名	N	%
男子	否定的評価	149	45.15	否定的評価	294	44.21	否定的評価	243	42.56
	肯定的評価	69	20.91	肯定的評価	145	21.80	肯定的評価	111	19.44
	無関心	51	15.45	両価的評価	98	14.74	両価的評価	80	14.01
	身体，外見	15	4.55	無関心	39	5.86	無関心	35	6.13
	あいさつ	14	4.24	身体，外見	32	4.81	身体，外見	30	5.25
	該当なし	9	2.73	あいさつ	14	2.11	あいさつ	28	4.90
	仲間	8	2.42	該当なし	10	1.50	該当なし	11	1.93
	普通	8	2.42	所属する場所	7	1.05	所属する場所	9	1.58
	数	3	0.91	普通	7	1.05	仲間	7	1.23
	所属する場所	2	0.61	仲間	6	0.90	謝罪，感謝	5	0.88
	謝罪，感謝	1	0.30	謝罪，感謝	5	0.75	不在	4	0.70
	仕事内容	1	0.30	不在	3	0.45	普通	3	0.53
				仕事内容	3	0.45	家庭・家族	2	0.35
				仲間	1	0.15	仕事内容	2	0.35
				状態・状況	1	0.15	数	1	0.18
小計		330	100		665	100		571	100
女子	否定的評価	26	30.59	否定的評価	34	33.33	否定的評価	20	40.00
	肯定的評価	19	22.35	肯定的評価	23	22.55	肯定的評価	13	26.00
	無関心	12	14.12	無関心	21	20.59	無関心	5	10.00
	該当なし	11	12.94	身体，外見	10	9.80	家庭・家族	4	8.00
	身体，外見	7	8.24	所属する場所	5	4.90	仲間	2	4.00
	あいさつ	6	7.06	あいさつ	5	4.90	あいさつ	2	4.00
	所属する場所	2	2.35	仲間	2	1.96	該当なし	2	4.00
	不在	1	1.18	仕事内容	1	0.98	仕事内容	1	2.00
	普通	1	1.18	該当なし	1	0.98	普通	1	2.00
小計		85	100		102	100		50	100

表５　親の分類表

	年少群（14-15歳）			中間群（16-17歳）			年長群（18-19歳）		
	分類項目名	N	%	分類項目名	N	%	分類項目名	N	%
男子	肯定的評価	232	67.44	肯定的評価	449	66.82	肯定的評価	371	63.42
	謝罪，感謝	34	9.88	謝罪，感謝	81	12.05	謝罪，感謝	83	14.19
	否定的評価	30	8.72	否定的評価	40	5.95	否定的評価	35	5.98
	身体，外見	16	4.65	身体，外見	32	4.76	身体，外見	31	5.30
	仕事内容	13	3.78	仕事内容	28	4.17	仕事内容	21	3.59
	家庭・家族	8	2.33	該当なし	17	2.53	該当なし	20	3.42
	該当なし	5	1.45	家庭・家族	8	1.19	家庭・家族	13	2.22
	無関心	4	1.16	無関心	6	0.89	不在	3	0.51
	数	1	0.29	数	5	0.74	数	3	0.51
	状態・状況	1	0.29	状態・状況	5	0.74	状態・状況	3	0.51
				所属する場所	1	0.15	無関心	2	0.34
小計		344	100		672	100		585	100
女子	肯定的評価	52	61.18	肯定的評価	74	71.15	肯定的評価	33	56.90
	否定的評価	12	14.12	身体，外見	8	7.69	仕事内容	12	20.69
	身体，外見	7	8.24	謝罪，感謝	8	7.69	否定的評価	6	10.34
	謝罪，感謝	7	8.24	否定的評価	5	4.81	謝罪，感謝	3	5.17
	家庭・家族	2	2.35	状態・状況	3	2.88	該当なし	3	5.17
	仕事内容	2	2.35	仕事内容	2	1.92	身体，外見	1	1.72
	状態・状況	1	1.18	家庭・家族	2	1.92			
	普通	1	1.18	数	1	0.96			
	該当なし	1	1.18	無関心	1	0.96			
小計		85	100		104	100		58	100

表６　性別・年齢別構成

年齢			14歳未満	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	合計
東京	男子	N		2	22	26	19	16	23	108
		%		1.9	20.4	24.1	17.6	14.8	21.3	100
	女子	N			2	4	1	1		8
		%			25.0	50.0	12.5	12.5		100
	計	N		2	24	30	20	17	23	116
		%		1.7	20.7	25.9	17.2	14.7	19.8	100
大阪	男子	N	1	14	18	20	20	24	16	113
		%	0.9	12.4	15.9	17.7	17.7	21.2	14.2	100
	女子	N		4	3	3	2	1	2	15
		%		26.7	20.0	20.0	13.3	6.7	13.3	100
	計	N	1	18	21	23	22	25	18	128
		%	0.8	14.1	16.4	18.0	17.2	19.5	14.1	100
合計	男子	N	1	16	40	46	39	40	39	221
		%	0.5	7.2	18.1	20.8	17.6	18.1	17.6	100
	女子	N		4	5	7	3	2	2	23
		%		17.4	21.7	30.4	13.0	8.7	8.7	100
	計	N	1	20	45	53	42	42	41	244
		%	0.4	8.2	18.4	21.7	17.2	17.2	16.8	100

ているかについて，できるだけ非行少年自身の言葉で率直に表明させるため，自由記述方式で回答を求めた。

イ　対象者

今回は，分析対象を限定することとし，地域差の影響を避けるため東西二大少年鑑別所の被収容少年を対象とした。その内訳は，東京116人（男子108人，女子８人）と大阪128人（男子113人，女子15人）の計244人である。

表６は，対象者の性別・年齢別構成について見たものである。ちなみに，平均年齢は，東京が男子16.9歳，女子16.1歳であり，大阪が男子16.6歳，女子15.9歳である。また，先に述べた全国集計に比べ，本対象者は，14,15歳の低年齢層がやや多く，16,17歳の中年齢層がやや少なくなっている。

ウ　認知された少年重大事件

表７は，これまでテレビや新聞で報道された少年事件のうち，最も印象に残っている事件は，①いつころ，どこで，どんな少年による，どんな事件か，また，②その事件についてどう思ったかという質問に対し，自由に記述させた結果を集計したものである。

集計に当たっては，あらかじめ，過去３年以内に発生した少年重大事件について，少年が認知可能と思われる新聞紙（全国紙）等からリストアップしたが，記事のばらつきが大きいため，福田（2001）のリストから補足した。

少年によって記載された事件は，記憶のあいまいさ，記述の不足等から，特定不能なものも見られたが，社会の耳目をしょう動する少年事件があったためか，発生時期，場所，犯人像，犯罪内容等の記述から，予想されたよりも容易に特定することができた。なお，回答者が１名のものや，マスコミ報道でほとんど触れられなかったため一部関係者しか認知できなかったものなどは，その他の事件として一括計上した。非該当とした事件は，成人によるものなどである。事件概要欄は，発生場所により西から東への順序としたが，年月日については，事件の発生時では件数が複数であるなど特定しがたいので，犯人の逮捕年月日としている。

重大少年事件として，神戸市須磨区で発生した連続幼児殺傷事件をあげる者が最も多く，47.1％と約半数を占めている。性別にみると，女子の方がやや多い。地域別では，東京と大阪ともに同様の比率であり，差はみられない。次に多いのは，佐賀県で発生したバス乗っ取り事件で，全体の15.6％であり，東京14.7％，大阪16.4％である。神戸連続幼児殺傷事件及び佐賀バス乗っ取り事件を合計すると62.7％となる。３位以下については，岡山県で高校生が野球部員を金属バットで殴り傷害を負わせ，さらに自宅で母親も殴って死亡させた事件が4.1％であるが，この事件を挙げたのは大阪で7.0％であるのに対し，東京では１％に満たない。また，大阪府堺市におけるシンナー常習少年による幼女等刺傷事件については，大阪で3.1％であるが，東京では０％である。逆に，東京都大田区と練馬区における暴走族による集団殺人事件については，東京では2.6％あるが，大阪では０％である。

エ　少年重大事件に対する感想

表８は，先に挙げた最も印象に残った事件に対して，どのように感じたり，思ったりしたか自由に記述させ，それを肯定的，否定的，どちらともいえないに分類し，性別，地域別に集計したものである。

これによると，否定的感想が約８割を占め，どちらともいえないが11.5％，肯定的感想が4.1％である。性別では，男子の方が女子より否定的感想を持つ者がやや多い。また，地域別では，東京の方が大阪よりも否定的感想を持つ者がやや多い結果となっている。

否定的感想の内訳をみると，犯人が普通でない精神的に異常なためだとし，批判するも

表7　最も印象に残っている少年重大事件

少年による重大事件		事件の概要	佐賀・バス乗っ取り事件	小倉区・一家殺人事件	神戸・須磨区・幼児連続殺傷事件	大阪・堺市シンナー少年幼女刺傷事件	岡山・邑久・金属バットで母殺害事件	愛知・豊川・主婦で殺害経験事件	名古屋・緑区・暴走族5千万円恐喝事件	東京・大田区トーヨーボール暴走族殺人事件	東京・練馬区光が丘暴走族殺人事件	その他の事件	特定不能	非該当	無回答	合計
		逮捕年月	H12.5.4	H12.8.14	H9.6.28		H12.6.21	H12.5.2	H12.4.5	不明	不明					
東京	男子	N	16	2	50		1	1	1	3	3	9	14	4	4	108
		%	14.8	1.9	46.3		0.9	0.9	0.9	2.8	2.8	8.3	13.0	3.7	3.7	100
	女子	N	1		4							2		1		8
		%	12.5		50.0							25.0		12.5		100
	計	N	17	2	54		1	1	1	3	3	11	14	5	4	116
		%	14.7	1.7	46.6		0.9	0.9	0.9	2.6	2.6	9.5	12.1	4.3	3.4	100
大阪	男子	N	19		53	3	9					13	7	5	4	113
		%	16.8		46.9	2.7	8.0					11.5	6.2	4.4	3.5	100
	女子	N	2		8	1						1	2		1	15
		%	13.3		53.3	6.7						6.7	13.3		6.7	100
	計	N	21		61	4	9					14	9	5	5	128
		%	16.4		47.7	3.1	7.0					10.9	7.0	3.9	3.9	100
合計	男子	N	35	2	103	3	10	1	1	3	3	22	21	9	8	221
		%	15.8	0.9	46.6	1.4	4.5	0.5	0.5	1.4	1.4	10.0	9.5	4.1	3.6	100
	女子	N	3		12	1						3	2	1	1	23
		%	13.0		52.2	4.3						13.0	8.7	4.3	4.3	100
	計	N	38	2	115	4	10	1	1	3	3	25	23	10	9	244
		%	15.6	0.8	47.1	1.6	4.1	0.4	0.4	1.2	1.2	10.2	9.4	4.1	3.7	100

表8　少年重大事件に対する感想

感想			否定的							どちらともいえない				肯定的				無回答	合計
			犯人を異常だと決めつけるもの	怒り、恐怖等の嫌悪感を表現するもの	何故そこまで、と間接的に否定するもの	被害者やその家族に同情するもの	絶対してはいけない、厳罰にすべきだとするもの	その他	小計	その事件をとおして自己反省するもの	その事件に比べれば自分のたいしたことではないとするもの	その他	小計	スリルのためか、目立ちたかったからだろう。動機は理解できる、とするもの	すごい、と感嘆するもの	その他	小計		
東京	男	N	27	26	9	7	18	3	90	4	2	3	9	3	2		5	4	108
		%	25.0	24.1	8.3	6.5	16.7	2.8	83.3	3.7	1.9	2.8	8.3	2.8	1.9		4.6	3.7	100.0
	女	N	2		2	1		1	6	1			1		1		1		8
		%	25.0		25.0	12.5		12.5	75.0	12.5			12.5		12.5		12.5		100.0
	計	N	29	26	11	8	18	4	96	5	2	3	10	3	3		6	4	116
		%	25.0	22.4	9.5	6.9	15.5	3.4	82.8	4.3	1.7	2.6	8.6	2.6	2.6		5.2	3.4	100.0
大阪	男	N	27	19	16	8	18	3	91	5	1	6	12	2	2		4	6	113
		%	23.9	16.8	14.2	7.1	15.9	2.7	80.5	4.4	0.9	5.3	10.6	1.8	1.8		3.5	5.3	100.0
	女	N	2	3	2		3		10			3	3					2	15
		%	13.3	20.0	13.3		20.0		66.7			20.0	20.0					13.3	100.0
	計	N	29	22	18	8	21	1	99	5	1	12	18	2	2		4	7	128
		%	22.7	17.2	14.1	6.3	16.4	0.8	77.3	3.9	0.8	9.4	14.1	1.6	1.6		3.1	5.5	100.0
合計	男	N	54	45	25	15	36	4	179	9	3	12	24	5	4		9	4	221
		%	24.4	20.4	11.3	6.8	16.3	1.8	81.0	4.1	1.4	5.4	10.9	2.3	1.8		4.1	1.8	100.0
	女	N	4	3	4	1	3	1	16	1		3	4		1		1	1	23
		%	17.4	13.0	17.4	4.3	13.0	4.3	69.6	4.3		13.0	17.4		4.3		4.3	4.3	100.0
	計	N	58	48	29	16	39	5	195	10	3	15	28	5	5		10	5	244
		%	23.8	19.7	11.9	6.6	16.0	2.0	79.9	4.1	1.2	6.1	11.5	2.0	2.0		4.1	2.0	100.0

のが最も多く全体の23.8％を占めている。次いで，犯人に対する怒りまたは恐怖心等から嫌悪感を示すものが19.7％となっている。さらに，動機が理解できないためか，何故そこまで（残酷なことを）するのか，と問いかける形で否定するものが11.9％ある。また，被害者等への同情を通じて犯人を否定するものが6.6％であった。一方，犯人を厳罰にすべきだという者も16.0％あった。

肯定的な回答としては，すごいと感嘆するものもあったが2.0％と少数である。また，犯人の動機を目立ちたかった（自己顕示）ためだろうとし，一応理解できると回答した者も2.0％しかない。

肯定とも否定ともいえないものについては，その事件を通して自己反省するものが4.1％，その事件に比べれば自分の非行はたいしたことではないとするものが1.2％であり，その他を含めても11.5％に留まっている。

5　考察

(1)　言語連想による社会認知

今回の調査結果から全体を概観すると，非行少年が社会認知を構成する上で重要であると思われる単語，すなわち「警察官」「近所の人」「親」「学校の先生」という単語について，肯定的評価と否定的評価によってとらえており，これは男女ともに共通の反応であることが分かる。つまり，対象をとらえる場合に，その対象は自分にとってどのような存在であるのか，自分はどのようにその対象を認知するのかということに対して，非行少年は対象の在り方や機能よりも対象に対する自らの価値による判断を優位においているといえる。対象の持っている社会的機能が異なっていようと，自分にとっての価値で判断するということは，自己を中心とした見方であり，客観的に物事をとらえようとしない姿勢や社会的事象に対する興味関心の低さをうかがわせる。ただし，今回の調査では，一般群との比較を行ってないため，今後の更なる横断的研究が必要であろう。

また，肯定的評価と否定的評価以外の分類項目に注目すると，「警察官」「学校の先生」からは，それぞれ「逮捕，治安を守る」「教える，授業」等の仕事内容が多く，日常生活場面の中で少年との具体的関わりが多くあったものと予想される。

「近所の人」という単語に対して，男子の中間及び年長群で「いい人・悪い人，好き・嫌い」等の内容の両価的評価が上位に見られる。

A.O.クリス（1987）は，思春期の自由連想について，アンビバレンス葛藤に支配されやすいことが特徴であるとしている。近所の人は身内でもなく，まったく知らない人でもないということから，男子の中間及び年長群は，自らの認知の枠組みにうまく位置づけることのできない不全感を抱いているのかも知れない。

「親」に対しては，「ごめんなさい，ありがとう」等の謝罪・感謝が特徴としてあげられよう。謝罪・感謝は，表５によると女子よりも男子の場合，より上位に出現している。非行少年の男子の年齢群でも出現率に差がないことから，男子の非行少年は，全般的に親との結びつきが強いと解釈できる。

(2)　少年重大事件の認知

ア　認知された少年重大事件

最も印象に残っている少年重大事件として神戸事件を挙げた者が，男女差，地域差がなく，それぞれ約半数を占め第１位であった。このことから，この事件が世間一般だけでなく，非行少年にも少なからぬ衝撃を与えたことを物語っている。第２位の佐賀事件においても，非行少年の間で広く認知されていることが認められた。この両事件に共通している

のは，犯人の少年が世間に対し，または，比較的多数の被害者に対し，犯罪行為を誇示し注目を浴びたいとする，いわゆる劇場型ないし愉快犯的な振る舞いのあったことが興味深い。この点からいうと，第3位の岡山事件は，犯人の少年が長距離の逃走をしたこともあってマスコミの注目を浴びたが，犯人自身が世間に挑戦するという姿勢はなく，前二者ほどの衝撃を与えることにはならなかったようである。第4位以下についても同様であり，必ずしも，事件の広がりや，被害の大きさによらないことが認められる。したがって，身近に生じた事件かどうかなどの地域差が認められるほか，女子は認知度が第4位以上の事件に限られるなどの男女差も生じることになっている。

以上の事件のほかに，愛知県豊川市の主婦殺人事件や名古屋市緑区暴走族5千万円恐喝事件のように全国的に報道され世間一般の注目を浴びた事件もあるが，いずれも中部圏にあるためか，東西いずれの非行少年に強い印象を与えることはなかったようである。

イ　少年重大事件に対する感想

少年の犯した重大事件については，非行少年の性別，地域差に関係なく，全体の8割近くのものが否定的な感想を述べている。一部マスコミで報道されたように事件に共感する者や模倣願望を抱くものはほとんどない。

しかし，少年の犯した事件が重大であるかどうかを別にすれば，非行をしたという点で共通点を持つ少年鑑別所収容の少年であるにもかかわらず，身近な事件として認知するよりも，いわば他人事として，世間一般の立場を採っていることが分かった。そこには，犯人が自分とは異質の人間だと思うことによって，自分と関係のない事件として切り離して認知するという心理機制が働いたものと考えられる。したがって，自分の非行と照らし合わせて，自らの教訓にしようとする姿勢にはつながらなかったものと思われる。

なお，地域差については，東京の方が否定的な感想がやや多いが，自由記述であったため，大阪では，その文化的背景からか，直接的な表現を避け，「何故？」など間接的な表現をすることが多いため明確に分類しがたいことも多少影響していることがあるかもしれない。

6　おわりに

言語連想法による分析からは，非行少年は今回提示された刺激語（対象）に対して，社会一般が認知している在り方や機能よりも，自分にとっての価値による判断を優位において認知していることが，特徴としてあげられた。

また，少年重大事件の認知については，新聞，テレビ等マスコミで報道される少年事件については，前記言語連想と同じく，自由記述方式で回答を求めたので，回答が区々になっていることや，少年の文章表現力，方言など地域による表現方法の差などの問題があり，その分類と数量化に当たっては，細部の厳密性は犠牲にせざるを得なかった。しかし，自由記述であるだけに，率直な意見の表明がなされており，少年の重大事件に対する考え方で参考になる情報が多く得られた。

すなわち，少年による重大事件については，ほとんどの者が認知し関心を持っていることが分かった。特に，神戸市須磨区で発生した幼児連続殺傷事件については，発生年が平成9年と掲載した事件中で最も古いにもかかわらず，性別，年齢，地域を超えて広く認知されていることから，事件の重大性・特異性と同時にマスコミの影響の大きさについても改めて考えさせられるものがある。

ただし，事件の受け止め方については，否定的な感想を持つ者が大部分を占めていることは認められるものの，全体に表面的で，事件を特異な人間の特異な事件ととらえ，犯人

を自分とは異質な人間と突き放して認知する特徴がある。したがって，犯人を批判することに終始し，報道された事件と自分の非行と関連させて反省をしたり，被害者や社会一般のことにまで関心を向ける者はきわめて少数である。

最後に，本研究の実施に当たり，調査に御協力を賜った法務省矯正局をはじめ矯正施設の各位に対して，心からの謝意を表します。

引用文献

A.O.クリス（神田橋條治・藤川尚宏訳）1987　自由連想　岩崎学術出版社 116-119

關崎勉　1989　非行少年の自由連想　矯正職務研究誌　第31号43-46

末永清，田島秀紀，井部文哉，渡部正，山口悦照，濱井郁子　2001　非行少年の社会認知に関する研究（その１）　中央研究所紀要　第11号　151-183

福田洋　20世紀にっぽん殺人事典　KK 社会思想社　2001　753-831